

## 外来語に生じる音韻過程 (I)

高橋 渉

### 1. 目的

ある言語の単語が別の言語に借入される際に、それらがいくつかの音韻過程を受けて借入先言語の音韻体系の中に組み込まれていくのは言語に見られる一般的現象である。本稿は日本語に借入された外来語（特に英語からの借入語）がどのような音韻過程を経て日本語の音韻体系に組み込まれていくのかを検討することを目的とする<sup>(1)</sup>。

本研究で扱う現象はまず本稿で音節構造の改変をもたらす変化を検討し、次稿ではセグメント自体の変化ならびに借入語音韻論がもつ理論的意義等を扱うことにする。

データの出典は特記したもの以外は「コンサイス外来語辞典第3版」, 「固有名詞英語発音辞典」など別記の辞典類から主として引用している。また Lovins (1975) に代表されるいくつかの先行研究に拠ったものもある。

### 2. 分析

#### 2.1 一般的特徴

日本語に借入された外来語に生じる音韻過程を論じる前に本節では外来語の音韻過程一般に見られる特質を概観しておこう。

竹林 (1979) が指摘するように、 $L_S$  から  $L_T$  に単語が取り入れられると、その単語は原語音に近い形で発音される。これは借入が生じる際には  $L_S$ ,  $L_T$  双方の言語をある程度理解する一種の Bilingualism (二言語使用能力) が必須の条件であれば当然のことであろう。

しかし  $L_S$  には存在したセグメント（あるいは音節構造）が  $L_T$  にはたまたま欠けている場合には、次第に借入語に変化が生じてくる。

- |     |                  |   |              |
|-----|------------------|---|--------------|
| (1) | $L_S$            |   | $L_T$        |
| a.  | Bach [bax]       | > | [ba:k, ba:x] |
| b.  | Mach [max]       | > | [ma:k, mæk]  |
| c.  | München [mynçən] | > | [mju:nik]    |
| d.  | Reich [raiç]     | > | [raik, raic] |

(1)において、 $L_S$  はドイツ語、 $L_T$  は英語である。ここで問題となるのは、[x, ç] というドイツ語には存在するセグメントが英語の音韻体系には欠けていることである。Reich 以外は固有名詞あるいは固有名詞に由来する普通名詞 (=Mach) なので、 $L_T$  においても原音が保

持されている場合があるが、ドイツ語の [x, ç] は [k] に音を変化させた発音が英語では優勢である。すなわち、

(2)

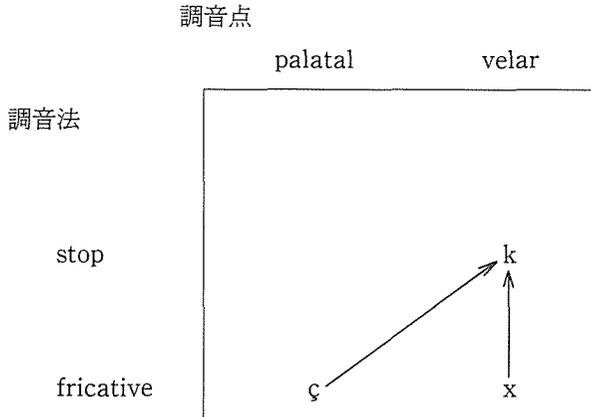


表2で明らかのように、 $L_T$  に存在しない音 [x, ç] を含むこれらの単語が  $L_S$  から借入された際には、[x] では調音点はそのままで摩擦音を破裂音に変化させる調音法の変化が生じ、一方 [ç] は口蓋摩擦音を軟口蓋破裂音へと、調音点、調音法双方の変化を受けたことになる<sup>(2)</sup>。

さらに(3)の事実を検討しよう。

(3)

- a. P(h)nom Penh [pəno:m pen] or [no:m pen]
- b. Knudsen [nu:dsn, knu:sn]
- c. Nkrumah [ŋkru:mə, ənkru:mə]

(3a) はカンボジアの首都名、(3b) はデンマーク系の姓、(3c) はガーナの独立運動指導者（のち大統領）の姓というように、いずれも借入後も原音を保持しやすい地名人名等の固有名詞である。したがって  $L_S$  の発音をそのまま  $L_T$  でも保持した発音も見られるが (/knu:sn/, ŋkru:mə/)、英語の音韻体系の中に組み込まれた発音もまた同時に見られることに注意しなくてはならない。

すなわち、(3a) では /pn-/ という語頭の子音連鎖は英語には許されないので、当該のクラスターにあいまい母音（シュワ音）を挿入して /pən-/ と分割するか、/pn-/ の第一子音 /p/ を削除することによって、許されない子音連結を持つ語を英語の中に取り込んでいる。また (3b) もまったく同じ原則から /kn-/ というクラスターを /n-/ に代えている。

(3c) は軟口蓋鼻音 /ŋ/ が語頭に生じた例である。/ŋ/ は本来英語においては語頭には

生起できないのであるが、ここでは [ŋk-] を [ənk-] として  $L_s$  には無かったあいまい母音を語頭に付加し、かつ軟口蓋鼻音を歯茎鼻音に変化させるという調音点の移動をも伴って、本来英語では許容されない音結合を許容可能なコンフィギュレーションへと改変しているのである。

本節では主として英語に借入された外来語がどのような音過程をたどって英語化されていくかをいくつかの例とともに概観したのであるが、これらの過程は(1)に見られるようなセグメント自体の変化、そして(3)に見られるような音節構造の変化を引き起こす音過程、の2つに大別できることがわかった。

次節以降では主として英語から借入されたいくつかの単語がどのように日本語の音韻体系に組み込まれていくかを、音節構造に加えられる変化、セグメント自体の変化の順に実例とともに検討し、それらのプロセスに見られる一般的特色を考察するとともにあわせてこれら借入語音韻論が持つ理論的意義を考察することとする。

## 2.2 音節構造の変化

### 2.2.1 語頭の子音連結

Hyman (1975:146) において次のような英語から日本語への借入語に見られる過程が指摘されている。

(4)

- a. paprica [pəpri:kə] > papurika
- b. public [pʌblik] > paburiku
- c. pulse [pʌls] > parusu

Hyman は英語における /-pr-/、/-bl-/、/-ls/ のような子音連結は日本語では許容されず、この許されない CC 構造を日本語が持つ典型的な音節構造 CV に改変する際に、 $L_s$  には存在しなかった母音が挿入されるのだがそれは /u/ であることが多いと指摘している。すなわち  $L_s$  の /CC/ が  $L_T$  では /CuC/ となるわけである。Hyman (*ibid.*) での主張自体は、日本語にこのように /u/ が epenthetic vowel として挿入されるのは、/u/ が日本語の中で最も無標 (=unmarked) な母音であることを示すためであったが、本稿では許されない子音結合を許容可能な連鎖に直す手段としての母音挿入について検討することとする<sup>(3)</sup>。

周知のように英語では語頭に許される子音連結は最大3子音、また語末に出現可能な子音連結は最大4子音である。まず語頭の子音連結が日本語化したときにその子音間に生じる母音の質について検討をしてみよう。

筧 (1971:90) によると語頭の3子音連結は(5)表のようにまとめられる。

(5)

	C <sub>1</sub> V	l	r	w	j
C <sub>3</sub> C <sub>2</sub>					
sp		splash	spring	*	spume
st		*	street	*	stew
sk		[sclerosis]	screen	square	skew

(\*は該当する単語が英語に存在しないことを示す。)

# C<sub>3</sub>C<sub>2</sub>C<sub>1</sub>V と並ぶ子音配列において英語では C<sub>3</sub> の位置には /s/ のみが生じることが知られている。# は語境界を示す。従って # が先頭に存在する文字列はそれが語頭であることを示し、逆に # が末尾に付加された文字列はそれが語末の文字列であることを示している。

また C<sub>2</sub> の位置には無声の両唇破裂音のシリーズが現われるので、(5)表のように英語では語頭の 3 子音連結としては /spl-/、/spr-/、/spj-/、/str-/、/stj-/、/skl-/、/skr-/、/skw-/、/skj-/ が存在することになる<sup>(4)</sup>。さてこれら(5)にあげた子音連結のいくつかは英語から日本語の中に外来語として借入されている単語の中にも見られるものが多いが、これらが日本語化したときどのような変化が生じているのだろうか。

(6)	L <sub>s</sub>		L <sub>r</sub>
a.	split	/spl-/	> supuriQto
b.	spring	/spr-/	> supuriNGu
	sprinkler		> supuriNkura:
c.	street	/str-/	> sutori:to
	strike		> sutoraiku
	stripe		> sutoraipu
	他		
d.	stew	/stj-/	> ſitʃu: or sutʃu:
e.	screen	/skr-/	> sukuri:N
	scramble		> sukuraNburu
	scrap		> sukuraQpu
	他		
f.	square	/skw-/	> sukuea:
	squelch		> sukerutʃi
	squawker		> suko:ka:

squash	>	sukaQju
squeeze	>	sukuizu
g. scuba	/skj-/ >	sukju:ba

(6)に列挙した例は語頭の子音連結以外のところでの音変化も生じているが(例えば/l/>/r/, 語末のC#>CV#など), これらは次節以降で検討することとしてここでは語頭の子音連結に挿入される母音の質にのみ焦点をあてることとする。

まず#SC<sub>2</sub>C<sub>1</sub>Vの連鎖のうち/s/の次に生じて日本語のCV構造に適合させるための挿入母音は一例を除いてすべて/u/である。例外は(6d)のstewであるが, これも外来語辞典には「シチュー」(=/sitʃu:/)の他に/sutʃu:/も記されており, この例外的な挿入母音/i/はこの語が借入されたのが明治時代であるという特異性によるものと思われる。「借入された時代」というファクターも重要なものであり, 借入された時代が明治期などという比較的古い時代と第二次大戦以降の新しい時代とでは, 借入語におこる音過程もかなり異なることがある。このことについては後述する。

次にC<sub>2</sub>の後に挿入される母音は/s/の後と同様, /u/が圧倒的に多いことがわかる。但し/t/の後には/u/ではなく/o/が生じているのは, 借入先の日本語音韻体系の中に/tu/が存在しないため, その結果一段階調音点を下げて/to/が生じたためであろう。この現象は後述の語末のC#がCV#となる音過程にも当てはまる。

(6f)に見られる半母音/w/の消失については, セグメント自体の変化を扱う2.3以降において扱うことにする。

さて次に, 語頭の2子音連結が日本語化した時に生じる音節構造の変化について検討してみよう。寛(*ibid.*)によると英語において生産的な語頭の2子音連結は(7)のごとくなる。

(7)

- a. /pl-/ , /pr-/ , /pj-/
- b. /tr-/ , /tw-/ , /tj-/
- c. /kl-/ , /kr-/ , /kw-/ , /kj-/
- d. /bl-/ , /br-/ , /bj-/
- e. /dr-/ , /dw-/
- f. /gl-/ , /gr-/
- g. /fl-/ , /fr-/ , /fj-/
- h. /θr-/ , /θw-/
- i. /sp-/ , /st-/ , /sk-/ , /sm-/ , /sn-/ , /sl-/ , /sw-/
- j. /ʃr-/
- k. /vj-/ , /mj-/ , /hj-/ , /hw-/

ここでも, 註4に示したようにいくつかの子音連結は英語のきわめて周辺的な語彙を除い

て生じないので(7)から除いてあるものもある。例えば/sv-/ (=svelte), /ʃw-/ (=schwa), /sf-/ (=sphere), /gw-/ (=Gwen) などである。

ではこれらの語頭の2子音連結をもつ語が英語から日本語へと借入されたとき生じる母音挿入について検討しよう。

(8)	$L_S$		$L_T$
a.	play	/pl-/>	purei
	plastic	>	purasutʃiQku
b.	try	/tr-/>	torai
	trouble	>	toraburu
	tray	>	torei
	tree	>	tsuri:
	twin	/tw-/>	tsuin
	twist	>	tsuisuto
	twilight	>	towairaito
c.	clock	/kl-/>	kuroQku
	club	>	kurabu
	cream	/kr-/>	kuri:mu
	craft	>	kurahuto
	quick	/kw-/>	kuiQku
	quilt	>	kiruto
	quintet	>	kuiNteQto
d.	blow	/bl-/>	buro:
	bread	/br-/>	bureQdo
e.	drink	/dr-/>	doriNku
f.	glove	/gl-/>	gurabu
	group	/gr-/>	guru:pu
g.	flash	/fl-/>	huraQʃu
h.	three	/θr-/>	suri:
i.	/sp-/、/st-/、/sk-/については前述の3子音連結の場合と同じ。		
	smoke	/sm-/>	sumo:ku
	snow	/sn-/>	suno:
	slow	/sl-/>	suro:
	switch	/sw-/>	suiQtʃi
j.	shrimp	/ʃr-/>	ʃuriNpu

(8)に明らかな通り、英語の2子音連結が日本語に入ってきた時その間に割って入る母音は

(8b) の/t/の後以外はすべて/u/である。この(8b)の例外的ステイタスについてはすでに述べた。(ただし、(8b)には/tsuri:/という例外がある。)

また(7e)の/dw-/、(7g)の/fj-/、(7h)の/θw-/などは、日本語に入ってきた英語としては存在していないようである。(7k)に現われた4つの2子音連結のうち、最後の/hw-/以外は日本語でも拗音として許容される子音連結であるので、母音挿入は行なわれな。そこで最後の/hw-/について検討してみよう。

(9)	L <sub>s</sub>		L <sub>r</sub>
whale	[hweil]	>	hoe:ru
what	[hwat]	>	howaQto
wheel	[hwi:l]	>	hoi:ru
whip	[hwip]	>	hoiQpu
whistle	[hwisl]	>	hoiQsuru
white	[hwait]	>	howaito

以上から/hw-/の連結はいずれも/o/がその間に割って入るのが観察される。さらに興味深い事実として日本語では、英語に存在した半母音/w/はその直後に英語の[-back]の母音が存在する場合のみ、日本語化したとき当該の/w/が削除され[+back]の母音が後続するとその/w/は保持されているのがわかる。

以上英語の語頭に現われる子音連結を日本語に借入した際に生じる挿入母音を事例別に列挙し検討を加えた。次節では英語の語末に現われる子音連結の場合を観察をしてみよう。

### 2.2.2 語末の子音連結

英語の語末の子音連結で最大の連鎖は4子音連結であることが知られているが、その構成要素を見ると語頭のそれとは微妙に異なったものであることがわかる。

(10)	
exempts	/-mpts/
texts	/-ksts/
twelfths	/-lfθs/
glimpsed	/-mpst/

(10)にあげた例は語末に4子音連結を持つ語の一部であるがいずれもいちばん最後の子音は複数形を示す形態素/-s/または規則変化動詞における過去、過去分詞形の形態素/-t/が3子音連結の末尾に付加されたものであって、この意味では純粋な4子音連結(つまり形態素境界をその内部に含まない語)は英語に一例も見あたらない。

名詞の複数形や動詞の3人称単数形をあらわす形態としての/-s, -z/,あるいは前述の過

去, 過去分詞の形態素/-t, -d/は音素配列論上では特に別個に考えるべきセグメントではないのだが, 日本語への借入語という本稿のテーマに沿ったレベルではこれらの形態素が付加されたまま日本語に借入される例はきわめてまれと思われる<sup>(6)</sup>。従って, 本稿では語末の4子音連結は特に考慮しないこととする。

同じように, 語末に生じる3子音連結も以上の形態素を除外するときわめて限られたものとなる<sup>(6)</sup>。

(11)

- /-mps/ glimpse のみ
- /-mpt/ prompt, attempt 等13例
- /-lks/ calx, falx のみ
- /-kst/ text, next のみ
- /-dst/ amidst, midst のみ
- /-nst/ against のみ
- /-gst/ amongst のみ
- 他に /-ŋks/, /-ŋgθ/, /-ŋkt/

英語の中で3子音連結を持つものは/-s, -z, -t, -d/などの屈折接尾辞を含んだものでさえ, 70程に限られているので, さらにその中から借入語として日本語に入ったものはきわめて少数になるのも当然である。

またこれら3子音連結のうち Nasal+C+C となる連鎖は日本語でも鼻音は1つの独立したモーラとして存在可能であるから, その振舞いは後述の語末の2子音連結と同様になる。

以上を考慮すると, 英語の3子音連結のうち, 日本語に借入されたものはほぼ text, next の2語のみといってよい。そしてこの2語における挿入母音は, いままで考察した事例から逸脱したものではない<sup>(7)</sup>。

子音連結の最後に語末の2子音連結を考えてみよう。いままで述べた理由から鼻音を含むクラスター, ならびに/-s, -z, -t, -d/を除いた英語の生産的な語末の2子音連結は次のようになる。

(12)

- a. /-pt/, /-pθ/, /-ps/
- b. /-tθ/, /-ts/
- c. /-kt/, /-ks/
- d. /-ft/, /-fθ/
- e. /-sp/, /-st/, /-sk/
- f. /-lp/, /-lt/, /-ltʃ/, /-lk/, /-lb/, /-ld/, /-ldʒ/, /-lf/, /-lθ/, /-ls/, /-lʃ/, /-lv/, /-lm/, /-ln/

(13)は(12)にあげた子音連結を持つ単語のうちから日本語に借入された単語のいくつかである。

(13)	$L_s$		$L_T$
	concept	/-pt/ >	koNseputo
	act	/-kt/ >	akuto
	box	/-ks/ >	boQkusu
	craft	/-ft/ >	kurahuto
	test	/-st/ >	tesuto
	desk	/-sk/ >	desuku
	milk	/-lk/ >	miruku
	他		

(13)から明らかなように(12)に列挙した CC の結合を破るために介在する母音はすべて期待通りに/u/が現われている。

### 2.2.3 語末への母音付加

音節構造に加えられる変化の最後として、英語の C# の構造が日本語に借入された際に生じる CV# への変化について考察することにしよう。英語の単語は閉音節で終わることが許されるが日本語は鼻音など一部を除いて一般に閉音節ではなく開音節で終了しなくてはならない。従って英語の... VC# の連鎖は日本語に借入された場合語末には英語に存在しなかった V を付加し... VCV# の構造に音節構造を改変させられる。

(14)	$L_s$		$L_T$
	cup	>	kaQpu
	snob	>	sunoQbu
	hit	>	hiQto
	bed	>	beQdo
	book	>	buQku
	mag	>	magu

上記の事実はいままで観察した例にすべて合致するもので、有声無声を問わず歯茎音以外の後では/u/が生じ、歯茎音の後では/o/が付加されている。

ところが(15)を見てみよう。

(15)	$L_s$		$L_T$
	match	/-tʃ/ >	maQtʃi

punch	>	paNtʃi
inch	>	iNtʃi
bridge /-dʒ/	>	buridʒi
stage	>	sute:dʒi
brush /-ʃ/	>	burafi

これらの例は語末の C が /tʃ, dʒ, ʃ/ などの口蓋歯茎摩擦音ないし口蓋歯茎破擦音のあとでは、/u/ではなく/i/が付加されることを示している。ただし、(15)のうちの最後の例、/burafi/は明治時代の借入語で現在の日本語に/ʃ/が入ってきたら/burafu/という音連鎖を示すことが flash > /huraʃu/, fish > /fiʃu/といった例からも期待できる。ただし破擦音 /tʃ, dʒ/には/u/が付加された例は見あたらなかった。

(6d) を検討した際にも言及したが、当該の語が「借入された時代」によって普通期待される挿入母音と異なった母音が生じることがあるのは、(16)のような単語のペアからも明らかである<sup>(8)</sup>。

(16)	L <sub>s</sub>	>	L <sub>T</sub>
a.	Jack	>	{ dʒaQku (固有名詞) dʒaQki (機械)
b.	check	>	{ tʃeQku tʃiQki
c.	strike	>	{ sutoraiku (スポーツ) sutoraiki
d.	text	>	{ tekusuto tekisuto
e.	ink	>	{ iNku inki
f.	jam	>	{ dʒamu dʒami
g.	jug	>	{ dʒagu dʒoQki

これら英語では同一の語が日本語に2通り存在する例において筆者の言語的直感では /-Ci/ という語の方が /-Cu/ という語よりやや古めかしい発音に響く。つまり/u/の方が、現在優勢な挿入母音と感じられる。

このように同一の単語が日本語で、使用分野などの相違から別の音連結を持つケースを見つけたが、これらのうちいくつかは音韻論そのもので論じるべき事象というよりは、むしろ音韻論以外の要因も加味して考えるべき問題であるかもしれない。音韻論以外の要因とは、

例えば  $L_T$  を母語とする人々の  $L_S$  に対する習熟の度合いが考えられる。外国語にたいする習熟の度合いという要因は本来  $L_T$  には存在しなかった音素をさまざまな事情から  $L_S$  から直接借入し、その言語の音素としてしまう現象とも深く関わっている。このことについては、次章で詳述する。

以上、本稿では借入語に生じる音過程のうち、音節構造に改変を加える音過程について検討した。次稿では、セグメント自体の音過程について論じ、さらに借入語音韻論が持つ理論的意義について検討することとする。

(つづく)

## 註

- (1) 以下、借入元の言語は  $L_S$ 、借入先の言語を  $L_T$  と略記する。(S は source, T は target を意味する。) また印刷の都合から日本語の声門破裂音 /p/ を /q/ と発音記号を改変して表記することにする。
- (2) ただし周知のようにドイツ語では [x, ç] は先行する母音の [±back] に依存して相補分布を示すので、音素レベルでは2つのセグメントは音素/x/の異音とみなされている。従って、[ç] が調音点、調音法双方の変化を示すというのはあくまで音声レベルでの現象である。
- (3) (4)では他に、Cで終わる単語の後ろに母音が付加される現象(= (4 b, c)), 母音の質的变化((4)のすべて)、/l/ > /r/ への変化( (4 b, c)) も生じているが、これらについても順次検討する。
- (4) (5)における /skl-/ は英語にとって外来語的色彩の強い語に生じる周辺的な連結である。
- (5) カフス (=cuffs), グッズ (=goods) など例外が無いこともない。
- (6) 語末の子音連結の検索は、Lehnert (1971) によった。
- (7) ただし text が /tekisuto/ と /tekusuto/ という2種類の異形態を持つことについては、後述する。
- (8) 以下にあげる例のうちいくつかは、Lovins (*ibid.*), 石野 (1977) によった。

## 参考文献

- Hyman, Larry M. 1975. Phonology : theory and analysis. New York : Holt Rinehart & Winston.
- Lehnert, Martin. 1971. Reverse dictionary of present-day English. Leipzig : VEB Verlag Enzyklo-pädie.
- Lovins, Julie B. 1975. Loanwords and the phonological structure of Japanese. University of Chicago Ph. D. dissertation. Reproduced by Indiana Univ. Linguistics Club.
- 石野博史 1977. 「外来語の問題」岩波講座「日本語」第3巻 199-229頁 東京：岩波書店
- 大塚高信 他 (編) 1968. 固有名詞英語発音辞典 東京：三省堂
- 寛 寿雄 1971. 音韻論II 英語学大系第2巻 東京：大修館書店
- 北原保雄 (編) 1990. 日本語逆引き辞典 東京：大修館書店
- 小西友七 他 (編) 1988. ジーニアス英和辞典 東京：大修館書店
- 三省堂編修所 1979. コンサイス外来語辞典 第3版 東京：三省堂
- 竹林 滋 1979. 「外来語発音の英語化」英語青年 125巻 17-19頁

(1991年4月30日 受理)